

このセッション指導要項の使用について

※次からのページの「セッション指導要項」は、WB研修所に倣って構成しています。

しかしながら、内容については、セッション担当者の参考資料としても役立つよう、野営法研究会 Step2 でも十分に耐えられるよう、相当細かく、かつ高いレベルで書かれています。

言い換えれば、野営法研究会の主任講師を担当されるトレーナーは、当然持っているべきレベルであり、講師を担当するトレーニングチーム員等の皆さんも、ほぼ同様の知識であり、技能を有していることを求めているということです。

現在の県連トレーニングチームは、年々チーム員が減っており、またチーム員の知識・技能の向上を図る機会が大幅に減少してしまったこともあり、前述の「トレーニングチーム員等の皆さんも、ほぼ同様の知識であり、技能を有している」に満たないだろうチーム員も、講師として奉仕せざるを得ない状況になっています。

ここ数年、トレーニングチームの「自主トレ」という言葉を聞いたことがあろうと思います。トレーニングチームの集合訓練として勉強会（知識・技能の向上を図る機会）が実施できない状況において、チーム員の自主的な取り組みである「自主トレ」は推奨される課題研究の場があります。自らチャンスを求めて実践してください。

● H24.1 (2012.1) に県連盟コミッショナーからの通達文書「新訓練体系の導入と今後の活動・目標について」の中で

○全てのコミッショナー、トレーニングチーム員、トレーナーは原則として4つの部門の全ての指導内容について

知る → 理解する → 伝える → 教える

ができるレベルにあることとする。指導者に「私は他部門のことは知らない」と口にすることがないように。

○スカウティングの共通部分についての共通理解をとり、それぞれができること。

- ・スカウティングが求める発達とそれを実現するスカウティングの方法を理解する
- ・WB研修所の「位置付けと内容」の変更点とその運用方法をきちんと説明できる。
- ・各部門の基本動作を確実に（コミッショナー、トレーニングチームで統一）する。
- ・班制度：その意味と意義、方法と運営について確実に説明でき、各部門の違いを明確に理解する。
→パトロールの楽しさ、醍醐味が伝えられるように（自ら体験？）
- ・進捗制度：その意味と意義、方法と運営について確実に説明でき、各部門の違いを明確に理解する。
→ステップアップ、学び活用する楽しさが伝えられるように（これも自ら体験？）

○スカウティングの醍醐味が伝えられること。

- ・コミ、T T自らがScouting is Fun! を体現していること。それをして・・・
リーダーが「スカウティングを理解して、楽しんでほしい」
リーダーが「スカウティングを理解して、スカウトら楽しませるための努力・学習してほしい」
リーダーが「そして、その楽しいスカウティングを実施してほしい」
スカウトが「スカウティングを楽しんでいる！」

に繋げていく。

- ・パトロールの醍醐味
「One for All, All for One!」「和」「信頼」「名誉」と「スカウトの誇り」
の素晴らしさと大切さが体感できるように。
- ・「今できることをしても力は伸びない。できないことをしようとするから力は伸びるのだ!」を実感できるように。

○「トレーニングチームのメンバーはすごい!」と、全ての指導者たちが「ああんりたい!!」と「指導者の理想像」として感じ取れるよう、自らをして、かつ相互にその位置付けを高めていくこと。それには?

○指導者に持続的にエネルギーを送り続けること。指導者のモチベーションを上げていくこと。(以上抜粋)

・・・とあります。よろしくお祈りします。

※この「セッション指導要項」をそのまま使用すると、セッション時間は当然ながら足りなくなるばかりでなく、野営法研究会 Step1 に参加する方々のレベルを超えたものになることが懸念されます。

ですので、セッションを担当されるトレーニングチーム員の皆さんは、内容を十分に咀嚼し、参加者レベルに合ったアウトプットをもってセッションをされるようお願いいたします。

※定型訓練などというと、往々にして形式張った「基本論・原則論」が出てきますし、ちゃんとした講義をしなくてはならないと考えます。それは否定してはいけないものですが、ここではそれはしません。この Step1・Step2 は「研究会」です。一方的な講義や作業であってダメです。「なぜなぜ・どうして?」「なんで、こーなるの?」を参加者に考えさせ、我々の支援によって解答に導いていく・・・っていう下記の方法を用います。

問いの投げかけ → 考える → 話し合い → 発表 → 解説 → 共通理解

そのとき「Scouting is Fun!」がそこで明確に出ていなければならなりません。つまり、我々がどれだけ楽しく伝えられるか、参加者が、どれだけ楽しく研究でき、そして「おおっ!」と気づき&ガッテンしてくれるか・・・なのです。それが問われています。